

受付番号

留学・研究計画書

氏名 小野亮介	留学機関名 マルマラ大学トルコ学研究所
留学先国名 トルコ共和国	留学期間 西暦 2010年10月～2012年9月
研究テーマ トルコ共和国におけるゼキ・ヴェリディ・トガンの亡命活動と思想的展開(1925-32年)	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>現ロシア連邦バシコルトスタン自治共和国出身のゼキ・ヴェリディ・トガン(1890-1970)は 20 世紀の東洋学・トルコ学研究において多大な貢献を果たした人物であるが、青年時代にはロシア革命下の混乱にあるボルガ流域・南ウラル地域及びトルキスタン(中央アジア)においてトルコ系諸民族による自治独立運動を指導したことで知られ、その後トルコ共和国においても精力的にトルキスタン亡命運動(「トルキスタン民族同盟」TMB)に従事した。その深い学識や政治的経験に基づいた彼の言説は両大戦間期におけるトルコ民族主義、更には 1940 年代前半に頂点を極めた人種的な民族主義であるトゥラン主義において指導的な役割を果たした。トルコや欧米では優れた学者として生前より高く評価されていたが、グラスノスチ・ソ連解体以降は旧ソ連でも再評価が進められ、民族主義者としての側面とその思想が益々注目されるようになった。しかし従来の研究は各時代におけるトガンの活動や思想が個別に検討され、彼の思想形成における重要な契機と志望者が考えるトルコへの亡命(1925年)した後の知的活動はほとんど重視されてこなかった。</p> <p>1932年まで続くトルコでの亡命期間においてトガンは純粋な学術論文の他にも、TMB 機関誌『イエニ・トルキスタン』などを舞台に亡命者や知識人らを対象としてトルキスタンの歴史文化、そしてポリシェビキによる同地の支配などに関する様々な論文を執筆しているが、これらの著作からは文明、地域、民族、経済などトルコ民族のあるべき姿、民族主義の根幹をなす事柄に対する彼の理解が伺える。このような思想的展開はその出発点からして単なる形而上のものではありえず、TMB 内部の勢力争いが彼の言説にも影を落とし、また TMB を追放された後のトガンが排他色の強いトルコ民族主義を提唱するようになったように、亡命運動の推移に大きく左右されている。</p> <p>以上のように、暗中模索といってよい状態から出発したトルキスタン人という概念から排他的で熱烈なトルコ民族主義、トゥラン主義へと接近してゆく、これまで必ずしも解明されてこなかった過程に亡命活動の視点からアプローチを試みることを本研究の主要目的とする。研究対象となる 7 年間の史料の残存状況は芳しくなく、また当時のアラビア文字表記トルコ語が煩雑であるために、最晩年に著され史料的価値も高く評価されている回想録と比べるとほぼ手つかずのままの状態にあるが、同時代資料の利用により亡命当時のことを断片的にしか伝えていない回想録の限界を克服することを目指す。</p> <p>没後 40 年になる現在においても彼の民族主義思想は少なからぬトルコ人によって敬意をもって迎えられる。従って自分の研究は一部においてその思想的潮流を汲む現在のトルコ民族主義思想そのものを理解する基礎的な作業として位置付けられ、何らかの形で著作を公開するなどの手段によって研究の利用に供するだけでなく、トルコの一般社会にも還元できると考えている。</p>	

成果報告書

記入日 2012 年 10 月 1 日

氏名 小野 亮介	留学先国名 トルコ共和国	所属機関 ボアジチ大学
研究テーマ： トルコ共和国におけるゼキ・ヴェリディ・トガンの亡命活動と思想的展開（1925-32 年）		
留学期間： 2010 年 10 月 ～ 2012 年 9 月		
<p>2 年間の留学において報告者は主に以下の 2 点に従事した。1: 上記研究対象期、すなわちトルキスタン（現在の中央アジア）、ヨーロッパを経てトルコへ帰化・亡命し（1925 年）、その後第 1 回トルコ歴史大会（1932 年）へ反発した結果ヨーロッパへ去るまでの期間に出版されたトガンの諸作品の収集・検討、2: トルコ国内外に所蔵されるトガン関連の文書資料の収集。</p> <p>留学開始後の半年間は特に前者に力を入れた。まずロシア革命以後の動乱の結果トルキスタンからトルコやヨーロッパに亡命したトガンら知識人グループによる組織『トルキスタン民族同盟』（以下 TMB）が発行し、創刊以来彼が編集長を務めた機関誌『新トルキスタン』に取り組んだ。同誌は留学以前から従事していた重要史料であるが、他作品との比較により新たにホスト国トルコへの政治的配慮のために署名が付されていない論文・記事数点をトガンの作品として明らかにすることができた。これらの無署名作品は、単にポリシェビキに対する批判・トルコ共和国初代大統領であるアタテュルクの称賛にはとどまるものではなく、トルコ政府を過度に刺激しない範囲ではあるが彼の政治思想を探る上で重要な手掛かりになると思われる。</p> <p>またトルコ入国直後の講演を基にした論文にも着目した。一般にトルコ民族主義および、その亜種でありトガン自身も 1940 年代に深く携わるトゥラン主義においては「蒼天」・「新月」・「狼」などが民族的シンボルとされ、留学中の生活においてもこれらの意匠を日常的に目にしたが、当時のトガンの考えによれば、むしろ隣接するイラン民族の伝統的シンボルとされる「ライオン」・「太陽」がトルコ民族のそれとしてふさわしいとし、加えて製鉄のシンボル化を訴えていたことが明らかとなった。また報告者が把握する限り、『新トルキスタン』誌中においてトガンはトルコ民族の理想的故地「トゥラン」の語を全く使用しておらず、従来の研究で理解される彼の民族主義思想とは著しくかけ離れたものであった。結果としてこうした主張はトルコ社会から受け入れられることなく埋没し、代わりに尚武かつ排他的様相が彼の民族主義理解にも顕れることとなるが、その変容過程を追うことが今後の課題となる。</p> <p>またイスタンブール市立アタテュルク図書館、国立ベヤズット図書館を中心にトガンに関係する様々な論文や新聞記事を集めたほか、留学期間を通じ 2 か月に一度の頻度で首都アンカラに赴き、国立図書館やトルコ歴史協会図書館等でも資料収集に努めた。こうしたイスタンブール、アンカラでのトルコ語文献収集は非常に実りあるものであった一方で、日本では比較的容易にアクセスできる欧米語の工具類や雑誌</p>		

などがトルコ国内にほとんどあるいは全く所蔵されていないことも多く、トルコにおける歴史研究・東洋学研究の環境が十分には整備されていないと感じることも多々あった。

留学開始より半年が経過したころから留学を終えるまで取り組んでいたのは文書史料（トルコ語でアルシーヴ）、すなわち「一点もの」の調査・収集であった。

トルコ国内では上記の図書館などに所蔵される資料や現地で知り合った人々の所有するアルシーヴに閲覧したほか、幸運にも後述のオクタイ旧蔵アルシーヴを発見・購入することができた。その一方、特に力を入れたのはトルコ国外のものであり、2011年3月イギリス（ロンドン；オックスフォード）、2011年7-8月イラン（テヘラン）、2011年12月フランス（パリ）・イギリス（同上）、2012年6月カザフスタン（アルマトゥ；アスタナ）、2012年8月フランス（同上）、ドイツ（ボン；ゲッティンゲン）、オーストリア（ウィーン）の図書館・資料館を訪れた。奨学金応募当初に計画していたよりも頻りに調査旅行をできたのは、ヨーロッパの東端、アジアの西端に位置するトルコに留学していたからこそであり、日本から個々に出発するのと比べるとはるかに効率的・経済的に文書資料を集めることができた。とはいえ旅費交通費が計画より10倍近くかかることになり、費用捻出のためイスタンブールで生活する日本人子弟の家庭教師を数件受け持つこととなった。

文書資料収集のうち特に留学中最大の成果として挙げられるのが、報告者が1年以上従事したオックスフォード大学ボードリアン図書館所蔵の「オーレル・スタイン・ペーパーズ」である。イギリスの東洋学者オーレル・スタインは敦煌文書のイギリス招来がその功績としてよく知られているが、トガンはトルコ亡命以前より彼の知遇を得ていた。このコレクションは1932-33年にトガン-スタインの間で交わされた往復書簡、トガンの未刊行論文などから成り立っている。往復書簡からはトガンがスタインに絶大の信頼を寄せていたことが伺え、また自身がトルコを去らざるを得なくなった原因となった第1回トルコ歴史大会に対して強烈な不満や批判が述べられていることがわかった。従来の研究においてもトガンがトルコを出奔した直接的な理由は歴史大会におけるアタテュルクに近い主流派との不和・対立であったとされるが、トガン本人は後年の著作において建前論に終始した弁解をしているように思われる。しかし私信である本資料では彼の本音が赤裸々につづられており、トガン研究のみならず、当時の文教政策に対する知識人の反応を理解するうえでも非常に興味深い。

また書簡で言及される人物・事柄を詳細に検討した結果、トガンがスタインを始めとする多くのヨーロッパ東洋学者から支援を受けていたこと、11世紀の知識人アル・ビールニーの地理書諸作品に関するドイツ語モノグロフの出版を企図していたにもかかわらず、ナチスの台頭など様々な要因により失敗に終わったこと、イギリス地理学の影響を受けつつインド・イランの古代史に強い関心を持ち、トルコ史と結び付けようと試みようとしたことなどが明らかとなった。こうした点でこれらの書簡は1937年初版の研究書 *Biruni's Picture of the World* の先駆として評価できる。このようにトガンの学者としての形成を見ることができ一方で、歴史大会議事録と合致しない不自然な言及や史料の強引な解釈、先行研究の歪曲などが散見され、学者のあり方として必ずしも正しいとは言えない彼の人間臭さも見て取れる。これらの往復書簡は大半がドイツ語で認められているが、報告者はトルコ語に翻訳し解題と詳細な注を付した。2012年内にトルコの学術雑誌で出版される予定である。またドイツ語未刊行論文「南ペ

ルシアにおけるトルコ系諸部族」はこれまで題名のみが知られた作品であったが、トルコ世界と表裏一体であるイランおよびその内部で暮らすトルコ系住民に対するトガンの強い関心が伺えるものである。この論文も近い将来ぜひトルコ語に翻訳し出版したいと考えている。

亡命者としての活動に関する文献としてはトガンの敵対者からの視点に立った文書資料を集めることもできた。第一の人物にはトガンに先立ちパリに亡命し、彼と並び立つ TMB の実力者として知られるムスタファ・チョカイが挙げられる。パリの言語文化大学図書館（従来の東洋言語文化研究所図書館）所蔵の「アルシーヴ・ド・ムスタファ・ショカイ・ベイ」に含まれるチョカイの書簡では、1920 年代末から 30 年代初頭にかけてトガンとの関係が悪化していく様子が詳細に述べられていることが明らかとなった。報告書作成時点ではまだ詳細な検討には至っていないが、上述の『新トルキスタン』誌が TMB 内部の主導権争いに利用されているなど、未だ解明されていない点が多い亡命者としてのトガンの実像が明らかになることが期待される。

反トガンの立場にある第二の史料として、チョカイの支援者であるアブデュルヴァハブ・オクタイの旧蔵アルシーヴをイスタンブールの古書店で偶然にも入手できた。トガンやチョカイと比べるとオクタイは無名ではあるが、長らくチョカイを支え、彼の死後も友人とともに亡命コミュニティの中で指導的役割を果たした人物である。約 100 点に及ぶ書簡群は 1940-50 年代のものが主であり、報告者の研究テーマとは時代を少し異にするが、1939 年にトルコ帰国を果たしたトガンが再び TMB の主導権を巡り他の亡命者らと対立し、TMB が機能不全に陥った様子などが伺えるなど、研究対象期以降の彼の活動を補完する上で重要な史料になると思われる。またフィンランド在住のタタール人同胞らとの交流を伝える書簡や亡くなる直前のアヤズ・イスハキー（トガンのライバルであるイデル・ウラル運動の指導者）に宛てられた書簡など、亡命者らのコミュニティの当時の様子を伝える興味深い史料が多く含まれている。報告書作成時点ではこのオクタイ旧蔵アルシーヴについてもトルコ語での紹介記事を執筆している。

以上のように今後の研究史料としてトガンおよび関係者の書簡を利用する方針を確立できたことは留学中の大きな成果と言える。トガンが 1925 年に初めてトルコ入国するまでに至る革命家としての前半生における事績については自伝により詳細に知ることができるが、それ以降、特に偉大なトルコ学研究者としての後半生への過渡期といえる 1920 年代後半から 30・40 年代にかけての時期については未だ明らかとなっていない点も多い。したがってこれまで公となっていないトガンの様々な活動や思想を解明する上で重要な史料としてこれらの書簡群を活用してゆきたい。

上記の他に、カザフスタンでは晩年のトガンと親交があり、2010 年に亡くなったばかりのカザフ人ハサン・オラルタイの個人アーカイブを、またドイツ・オーストリアではトルコを離れた後トガンが学生・教授として在籍した 3 大学のアーカイブ群を閲覧することができた。イランではトガンのペルシア語論文を探すつもりだったが、現地での遅々とした対応により残念ながら目的を果たすことができなかった。

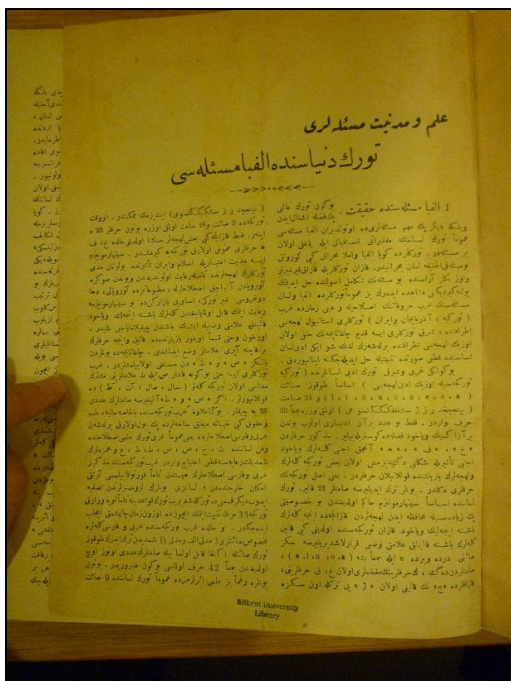
以上のような活動を通じ、研究者であるか否かに関係なく多くの人々と知り合うことができた。彼らは概して日本人に対して好意的であり、報告者にも様々な便宜を図っていただいた。例えばアンカラでは報告者と同じくトガンを研究する知人の家に二、三度滞在させていただいたが、夜遅くまで互いの研究や彼らの故郷であるバシュコルトスタンのことについて語り合ったのは得難い経験であった。また

創刊 100 年を迎えた著名なナショナリズム雑誌『トルコ人の母国』の編集部と良好な関係を持つようになるなど今後の研究活動に向けての足がかりを築くことができたと考えている。

留学期間中には多種多様な人々と会うことができ、また研究に関連してトルコ国内外の多くの都市を旅する機会もあった。時には麻薬の密売人らしき一団と遭遇することもあったが、ショートムービーの日本語吹き替えに挑戦したり、東日本大震災直後に日土学生有志らで募金活動を実施したりと（残念ながら調査旅行のため準備にしか携われなかった）、貴重な体験にも巡り合えたり、日々の生活でも美しい思い出が数多く残っている。以下特に印象に残り、留学を終えた現在もよく考えることを 2 点記したい。

第一の点はトルコ社会の急激な変化についてである。G20 加盟国中トップクラスの経済成長率を記録するトルコは目覚ましい発展を遂げており、ごく一部の側面に限って言えば日本よりも近代的であるし、大型商業施設の林立などはとても真似できそうにないパワーを感じられる。留学中の報告者が日常的に目にした光景が 5 年後、10 年後にそのまま残っている保証など全くない。その一方社会の変化は華やかなものばかりではないだろう。例えば留学中に知り合ったあるご老人は、若いころには日常生活の私的な部分でアラビア文字を使う習慣がまだあったため、癖のあるアラビア文字表記のトルコ語も研究者以上にすらすらと読める方であった。報告者もよくその教えを乞うたが、残念ながら報告者がトルコを去った直後に世を去ったと聞いた。現在では相応の教育を受けた人を除きトルコ語のアラビア文字表記は忘れ去られるばかりであり、彼のような人物の死は大きな損失といってよい。歴史学を学ぶ環境もまた時代や社会の変化に大きく左右されることを痛感した一件だった。また急激な発展の一方で、トルコには名誉殺人や年端も行かぬ少女が結婚を強いられる（テレビでよく流れていたキャンペーンコマーシャルは決して忘れられない）など悪しき習慣も残っている。社会の発展は凶悪犯罪の根絶はもちろんのこと、こうした負の側面を変えうる力を持っているのかどうかをこれからも見据えてゆきたい。

第二の点はトルコにおける出版・書籍販売についてである。日本ほど書籍の流通が良くないトルコでは、小ぢんまりとした専門書店で店主と談笑しながら購入すべき本を探してゆくのが一般的であり、これもまた貴重な経験であったが、ブックフェア（トルコ語でキタブ・ファル）が特に印象深い。イスタンブールとその近郊では数多くの出版社が参加するファルが年に 3、4 回催され、価格も 30—50%引きとなるため、報告者も可能な限り足を運んだ。広い会場を一巡りするのは骨の折れることだが、目当ての書籍を割安で購入できるだけでなく、表紙に目を通すだけでもトルコの社会事情が大まかに把握でき、非常に有意義であった。またどのファルにも宗教書関連の出版社が数多く参加するが、ある宗教書出版社の人は「トルコではありのままに近現代史を叙述することは困難だ。だから自分たちはリスクの少ない宗教書を出版している」と報告者に語ってくれた。トルコ共和国には、アルメニア人問題やクルド人問題の他にも共和国建設以来の様々なタブーが今もなお存在しており、アタテュルクの評価などトガン研究についても避けて通ることのできない問題が多々ある。トルコのように日本から遠く離れた地域を研究することに目に見えやすい直接的な利益を見出すのは困難ではあるが、彼の話の思い浮かべるたびに、こうしたタブーから距離をとることができる我々日本人だからこそ可能な客観的研究視野・手法があるはずだとの思いを強くしている。



左上：2012年にイスタンブール大学裏に設けられたトガン記念公園にて。報告者左の胸像がトガン。

右上：イスタンブール郊外イズミットで催された kitap・ファルにて

左下：『新トルキスタン』誌におけるトガンの論文「トルコ世界におけるアルファベット問題」冒頭

右下：バシキール人の民族衣装に身を包んで